

万葉の十人一首

湘現会会員 飯田朝明

万葉集は、現存最古の歌集で20巻から成っている。収められている歌数は約4,540首で、ほとんどが短歌であり、長歌が260余り、その他に旋頭歌等を載せている。

私と万葉の歌との出会いは、高校に入ってからである。それ以前も百人一首は知っており、その中には万葉集出典の歌もあるので、厳密に言えばそうではないかもしれないが、この歌は万葉集の歌だというようなことを明確に意識するようになったのは、高校生になってからである。

私が、万葉集をはじめとする日本の古典に興味を持つようになったきっかけに触れる。

高校入学1年目で古文を教えてくれた国語乙のA先生は、結婚して間もない身重の女性教師だった。授業を受ける生徒達は、先生が目立って大きくなってきたおなかが教卓の端にぶつかりはしないかと、授業もそっちのけで皆気をもんでいた。先生は、それを知ってか知らずか、いつも優しい声と仕草で、丁寧に熱心に授業を続けてくれた。先生は、時々クラス員名簿を取り上げ、問題を出したうえで、指名して生徒に答えを求めた。その都度、鉛筆でチェックされていたので、あくまで公平だったと思うが、先生から「いいだともあきさん」（クラスに飯田が2人いたからフルネームで呼ばれた。なお、私は「あきあき」と読む。）と指されるのが、迷惑半分、嬉しさ半分だったのが今でも思い起こされる。

万葉の個々の歌との最初の出会いは、「石激る垂水の上のさ蕨の萌え出づる春になりけるかも」であるが、それ以来知ることになった万葉の歌々は、私の心に直接的に響いてくるものが多く、私は、こうした万葉の歌と似たような言葉や現実に出くわすと、それらを口ずさむことになった。

今なぜ万葉集か、万葉集のことを書くのかということである。

我が国の文学としては万葉集が最古の歌集であり、その後の古今集や源氏物語、徒然草をはじめとする歌集、物語、随筆等も万葉集に基礎があり、今日に至るまでの日本における文学、文字表現の原点となっていることは間違いない。また、日本人の自然観、美意識、感受性、及び様々な社会事象への人間としての向き合い方に至るようなことだけでなく、万葉集編纂当時から現代に至るまでの日本文化全般につながる原形が、そこにはあると思うのである。つまり、この国宝ともいえる歌集、そこに載る歌の数々を知り、味わい、よく理解することが、そして、これを次代に引き継いでいくことが、今の日本国の国民にとっても、大きな意義があると思うからである。

そこで、私は、万葉集全体を見渡すため、遅ればせながら、その解説書として定評のある斎藤茂吉著の万葉秀歌（岩波新書上下2巻）を読むことにした。

茂吉先生は、その序で、「何せよ歌の数が四千五百有余もあり、一々注釈書に当たってそれを読破しようとするのは並大抵のことではないので、選集を作ることにした。選ぶ態度は、大体すぐれた歌を巻ごとに拾うこととし、数は全体の一割ぐらいとして、長歌はやめて短歌だけにしたから、万葉の短歌が四千二百足らずとして、その一割ぐらいを選んだ。これは国民全般が万葉集の短歌として是非知っておらねばならぬものを選んだためである。本書の目的は秀歌の選出にあり、加えてある評釈は、読者の参考、鑑賞の助手の役目に過ぎない。」（大意）と述べている。また、「読者諸氏は、本書から自由に三百首選、二百首選、一百首選乃至五十首選をも作ることが出来る。」とも述べている。

私は、このお言葉に甘え、僭越のそしりを受けることも覚悟で、万葉の十人の歌詠みと詠んだ歌一首を選び、茂吉先生の評釈も紹介しながら、選定した根拠や感想等を書き加えることにした。

私が選んだ、その十人の各一首は、次のとおりである。

なお、歌の漢字、かな及びルビについては、概ね茂吉先生の著書によっている。

にぎたづ ふなの つきま しほ いま い
熟田津に船乗りせむと月待てば潮もかなひぬ今はこぎ出でな 額田王

「熟田津で船出しようとして月の出を待っていると、月も出てきて、潮もちょうどよく満ちてきた、さあ漕ぎ出そう。」という意である。

斉明天皇の7年（661年）、斉明女帝は船団を組み、朝鮮半島の新羅に遠征するため九州博多に向かった。新羅に侵攻された百済救援のためである。皇太子中大兄皇子（天智天皇）、大海人皇子（天武天皇）をはじめ、皇女たちも同行したとされている。その途次伊予の熟田津に滞在されたが、お供をした額田王が詠んだ歌とされているが、斉明天皇の御製であるとの説もある。

これから戦闘に向かおうとする何十隻もの船が、夜間月明かりの中、潮の満ちてきた海の上を一斉に進んでいく光景を眼前にほうふつとさせる感がある。また、月の出と潮流は密接な関係があり、航海の重要な条件となるが、それをごく自然に取り込んでいる。

額田王は、天皇による国家的な行事があると、これに先立って祝詞のような歌を詠み、盛り立てるような役割を果たしていたようであり、女性であるが、力強い表現をよくしたと言われる。「潮もかなひぬ」、「今はこぎ出でな」という語句は歯切れがよく、何とも言えない良い響きがあると私は思う。

茂吉先生は、「に」、「と」、「ば」、「ぬ」等の助詞が極めて自然に使われている、結句は八音と字余りであるが、命令のような大きい語気であり、供奉応詔歌の真髓ここにあると評している。

わたつみ とよはたぐも いりひ こよい つくよあきら
渡津海の豊旗雲に入日さし今夜の月夜清明けくこそ 天智天皇

「大海原に大きくはためくような雲があつて、そこに燃えるような入日の射すのを見た。きっと今夜の月は明月だろう。」という意である。

「大海原」、「入日・夕焼け雲」、「月夜」という、日本古来の大自然にあるモチーフは本来は別々のものであるが、これらを一体なものとして壮麗に詠い上げており、そこに作者の気迫が融合し、胸に迫るものがある。力強さの一方で、胸がすくような開放感をも感じさせられる。豊旗雲という言葉を使ったのは、この歌が最初であるとか、この雲は雲の中で最も美しいとか言われている。

この歌は、前述の斉明天皇行幸時、瀬戸内海の播磨灘あたりを過ぎた時に遭遇した光景を詠まれたのではないかと、茂吉先生は推測している。

国賓等を招いて催される宮中晩さん会等の会場となる、皇居豊明殿には、中村岳陵作の「豊旗雲」を原画としたつづれ織りの障壁画があるが、この歌をモチーフとして、豊旗雲のさまが雄大に描かれている。インターネットに掲載の、何年か前のオバマ米大統領訪日時の晩さん会の写真には、その豊旗雲が大統領の後方に見事に映っている。

これもインターネットで見たものであるが、気象学会広報誌（昭和50年6月）掲載の「考証豊旗雲」という論文では、豊旗雲は、帯状絹雲という雄大な上層雲であつて、豊明殿の雲はそれとは異なるものである。これは孫悟空が乗ったような中国伝来の雲をイメージしたものではないかと、つづれ織りの制作者には責任はないとしながらも、異論を呈しているのが興味深い。また、天智天皇は、観天望気をされたのではないかと論じている。

むらさき いも にく ひとづま こ
紫草のほへる妹を憎くあらば人孀ゆえにあれ恋ひめやも 天武天皇

額田王の「あかねさす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る」の反歌である。

天智天皇が近江の蒲生野に薬草を採る宮中行事のため遊猟されたとき、皇太子の大海人皇子（天武天皇）と群臣がこれに従った折に詠まれた。

額田王は、大海人皇子との間で皇女を生むような関係にあつたが、のちに天智天皇に召されて宮中に侍していた。この歌は、そういう関係にあつた時の歌である。

「あなたが紫草の群生するこの御料地の野をあちこちとお歩きになって、私にお袖を振り遊ばされるのを野の番人から見られはしませんか。それが不安です。」という額田王に対し、大海人皇子が「紫草が匂うように美しいあなたが、もしも憎いのならば、今では人妻であるあなたに、そのようなことをしませんよ。今でもあなたに恋しているからですよ。」と答えたものである。

男女の間の複雑な恋愛感情を力強くかつ、内面にまで踏み込んで表現して余りあると思う。このような直接的でおおらかな言い方は、万葉集ならではの。二人が交わした歌の中で、一方は朝の茜色の光として、もう一方は、女性の美しさの表現として、「紫」がキーワードになっているが、この色は、古来美しく高貴な色とされており、この二首の背景

に、その鮮烈な色彩を帯びさせている。

今は天智天皇の後宮に入り、近づくことのできない額田王に、かつての夫大海人皇子が忍ぶ恋をしているように読めるが、実際の状況はそうではなく、おそらく遊獵後の宴席での、この3人の関係を知る人たちを前にしたやり取りだったという説がある。それにしても、きわどい応酬だったと言えよう。

はるす なつきた しろたへ ころも あめ かぐやま 持統天皇
春過ぎて夏来るらし白妙の衣ほしたり天の香具山

一首の意は、「春が過ぎて、もう夏が来たと見える。緑したたる天の香具山のあたりには、今日は真っ白い衣を干している。」というのである。

天の香具山は、奈良盆地の南部にあり、耳成山、畝傍山とともに大和三山として知られている。三山を男女に見立てて、女性の畝傍山を巡って、耳成山と争ったという伝説（三山の性別については、別説がある。）がある標高で152mの小高い丘といった趣の山である。この三つの山のほぼ中心に藤原宮があり、宮殿の東方に天の香具山がある。持統天皇は、その付近の池の堤の上からの情景を詠われたようであると茂吉先生は推測している。

白い衣が干してあるさまに春から夏への季節の移ろいを感じ取ったということそのまま詠ったという感がするが、「春」、「夏」、「白妙の衣」、「天の香具山（時季からみて、新緑に包まれていただろう。）」を絶妙に取り込んでおり、その情景が自然と目に浮かび、伝説、史実を含めた古代のロマンの香りが漂ってくるようである。

茂吉先生は、古今集や百人一首では、「夏来るらし」が「夏来にけらし」、「衣ほしたり」が「衣ほすてふ」となっているが、「らし」、「たり」で「い列」の音を繰り返し一種の節奏を得ており、このわずかな違いで、一首全体に大きな差が出ることを知らねばならない、また、結句で「天の香具山」と名詞止めにしたのも一首を整正端巖にしたと評している。

ひむがしの野にかぎろひの立つ見えてかへり見すれば月かたぶきぬ 柿本人麿

「東の方の野に暁の光がみなぎっているとき、振り返って西の方をみると、月が落ちかかっている。」という意である。「かぎろひ」は、私は、今までは「かげろう」のことかと思っていたが、旭日の余光であるという説を茂吉先生は紹介している。

朝方広い野に立ったら、きっと誰でもが同じようにまず東を見、それから西を見て、最後にその野の全体を見渡すであろう。その早朝の野のさまを正に一幅の絵のように歌で描いていることに特に感銘を受ける。

人麿は、耳が良かったと言われている。この歌の中に、意識して入れたのかどうかは不明であるが、複数の「ひ」、「の」、「ぬ」、「た」、「つ」、「み」、「き」をうまくちりばめており、全体として、やわらかさと流れるような快いリズムを与えている。

なお、時代が下って江戸時代になり、与謝蕪村は、「菜の花や月は東に日は西に」という名句と言われる俳句を詠んでいる。その中では、朝と夕方、日と月の位置が真逆になっているが、この歌が下地になっているのは間違いないと思う。

歌聖と呼ばれた人麿は、この他にも「天ざる夷の長路ゆ恋ひ来れば明石の門より倭島見ゆ」のような短歌だけでなく、長歌等でも、数々の珠玉のような歌を詠んでいる。

家にあれば筥に盛る飯を草枕旅にしあれば椎の葉に盛る 有馬皇子

「家にいるときは食器に盛るご飯を、こうして旅に出ると椎の葉に盛って食べるのだなあ。」という意である。

有馬皇子（孝徳天皇の皇子）は、中大兄皇子から謀反の疑いをかけられ、牟呂の湯（和歌山県白浜町）に護送された。その途次に詠まれた歌であるが、このとき19才である。

「草枕」は旅の枕詞であるが、この時は本当に草を枕にして寝たのではないかと思われるほど、この言葉がよく収まっている。「椎の葉に盛る」という言葉もいい。うら若い皇子が、まさに生死に直面している状況にあって、経験した現実を客観的に冷静に表現していることに、胸を打たれる。

茂吉先生は、感慨的な語がないのみでなく、詠嘆的な助詞も助動詞もないが、底を流るる哀韻を見のがし得ないと評している。

今のアウトドアでの野営の時は、これと同様に、草の上にビニールを敷いて寝るのだろうし、食器はポリ皿や紙コップを使用するのではないかと思うと、全く我々と同じだとも言える。今現在、自分の住む所で突然大きな自然災害が起こったとしたら、これと同じか、それ以上の悲惨な状況が待っているのではないかとまで考えてしまった。

田児の浦うち出でて見れば真白にぞ不尽の高嶺に雪は降りける 山部赤人

「田児の浦を船で沖に行くと、真っ白に富士の高嶺がそびえていて、雪が降り積もっている。」という意である。

今では世界遺産となっている富士山は、三保の松原との組み合わせの景観がよく知られているが、田児の浦は富士から最も近い海岸一帯を指し、三保よりはるかに近い。浦から船出したところ、青い海と海岸線の向こうに白雪を頂いた富士がそびえている。その雄大さ、美しさを三十一文字（みそひともし）の中で描き切っている。赤人は、山がもっと近くにある畿内に住んでいたのであろうから、今の我々が感じるより、もっと雄大なものとして富士を見上げたであろう。

銭湯の全盛期には、どこへ行っても湯船の向こう側の壁には、富士山と海と松林が描かれていたものだが、この定番の絵は、この歌をそのモチーフの起原とするものだと言ったとしても、過言ではない。そのくらい、今では日本の代表的な風景となっているが、それを最初に的確につかまえて見事に詠ったのである。

赤人のものは、総じて健康体の如くに清潔なところがあって、だらりとした弛緩がない、叙景歌の傑作であると茂吉先生は評している。

人麿と並んで歌聖と呼ばれた赤人の歌では、「若の浦に潮満ち来れば瀉を無み葦辺をさして鶴鳴き渡る」も、これに勝るとも劣らない。

しろがね くがね たま 銀も金の玉もなにせむにまされる 宝子に如かめやも 山上憶良

「銀も黄金も宝玉も一体何になろう。これにまさる宝はといえば、子以上の宝があろうか。ありはしない。」という意である。

憶良は、遣唐使に従い渡海したこともあり、漢学の素養は大いにあったが、日本語の古来の声調に熟し得なかったと茂吉先生は指摘しており、飛鳥朝、藤原朝の歌人の歌の読み方とはかなり異なっていると言われている。「瓜食めば子等思ほゆ、栗食めば況してしぬばゆ、何処より来りしものぞ、眼交にもとな懸りて、安寝し為さぬ」という長歌の反歌である。「瓜を食べれば子のことが思われる。栗を食べれば更に一層思われる。子供というのはいったいどこから来たものか、面影が目の前にちらついて、安眠もできない。」の意である。

茂吉先生は、この長歌を憶良の歌としては第一等である、反歌の方は、これに比べると言語の輪郭として受け取られる弱点があるので劣ると評している。私は、この反歌の評が意味するところがよく理解できなかつたのであるが、おそらく、表現に比べて、内容がやや乏しいということではないかと一応受け取ったのである。

人の子の親にとって、何より大切なものは子であることは、万葉当時から今の時代まで、変わることはない普遍的な真理と言えよう。このことを金銀、珠玉と対比して、簡潔に表現したこの歌を、私としては、先生の評にも関わらず、高く評価するものである。

最近、自分の幼い子供を虐待し、最悪の場合、死に至らしめるような親がいて、まったく驚くばかりだ。親の心情、心根をズバリと詠った憶良のこの歌を知っていたのだろうか、多分知らないと思うが、こうした輩には、この二首を紙に書いて、煎じて飲ませたらどうかと思う。

いはほし たるみ わらび も い はる 石激る垂水の上のさ 蕨の萌え出づる春になりけるかも 志貴皇子

「蕨の表面を音を立てて流れ落ちる滝の上の方のほとりには、早蕨が芽吹いている、そんな春になったのだなあ。」の意である。

作者は、おそらく自邸の宮殿にあって、初春の気配を鋭敏に感じ取り、どことも知れぬ、はるかかなたにあるだろう岩の間から流れ落ちる小さな滝を思い浮かべて、きっとその上には、蕨が萌え出しているに違いないと詠ったものと私は思う。

茂吉先生は、その辺のことには触れておらず、「垂水」が地名であるという説があるが、それにしても、垂水を写象の中に入れないと、この歌の価値が下がると思うと述べている。

「石激る」は、「垂水」の枕詞であるが、この2つの言葉で岩が幾重にも連なっている場所から小さな水流が落ちている情景を、この上なくよく表現している。その近くには蕨という早春に芽を出す植物があるだろうということに目を付けて、それが、まさに萌え出しているだろうと詠ったものであろう。

この歌は、「どこかで春が生まれてる どこかで水が流れ出す どこかで雲雀が啼いている どこかで芽の出る音がする」と詠った大正・昭和期の詩人百田宗次の詩「山の三月」

に、モチーフがそのまま引き継がれていると思う。童謡「春の小川」も、その延長線上にあるのかも知れない。

はる ぬ かすみ 春の野に霞 たなびきうらがなしこの夕かげにうぐひす鳴くも 大伴家持

「天平勝宝5年（753年）2月23日（今の暦で4月1日）、興に依りて作る歌二首」という題詞が付されていた歌であり、その一首目である。

「春の野には霞がたなびいて、なんとなくうら悲しく感ぜられる。その夕方のほのかな光がある中で、鶯が鳴いているのも。」という意である。このような悲哀の情をのべたのは、人麿以前の作歌にはなかったもので、この深く沁む、細みのある歌調は、家持あたりが開拓したものであると茂吉先生は述べている。

そうであれば、今の我々は、春の風情を「野に霞がたなびく」、「夕方に鶯が鳴く」と結び付けてなんの抵抗もなく受け入れているが、この歌が描いた春の野の光景があまりにも実際とピタリと合致していたため、日本人の深層意識の中に今日までそのまま引き継がれてきたのでないかと思うのである。

作歌二首目の「わが宿のいささ群竹吹く風の音のかそけきこの夕かも」は、「私の家の小さな竹林に夕方の風が吹いて、かすかな葉ずれの音を立てている、この夕べよ。」という意であるが、茂吉先生は、竹の葉ずれを幽かな寂しいものとして観入したのは、やはりこの作者独自のもので、中世期の幽玄の歌も特徴があるけれども、この歌ほど具象的ではないから、真の意味での幽玄にはなりがたいのであったと評している。

この二首は、今までの9首と比べて、詠いぶりに大きな違いがあるような感じがする。おおらかな詠いぶりがかげをひそめ、技巧性が目に付くようになっている気がする。それゆえに、私は、この二首には、その後編纂される古今集へとつながるような変化の兆しがあるという印象を持ったのである。

なお、家持作の短歌、長歌は、万葉集に収められている歌の1割以上を占めているそうで、家持は、その編纂にかかわったとみられている。